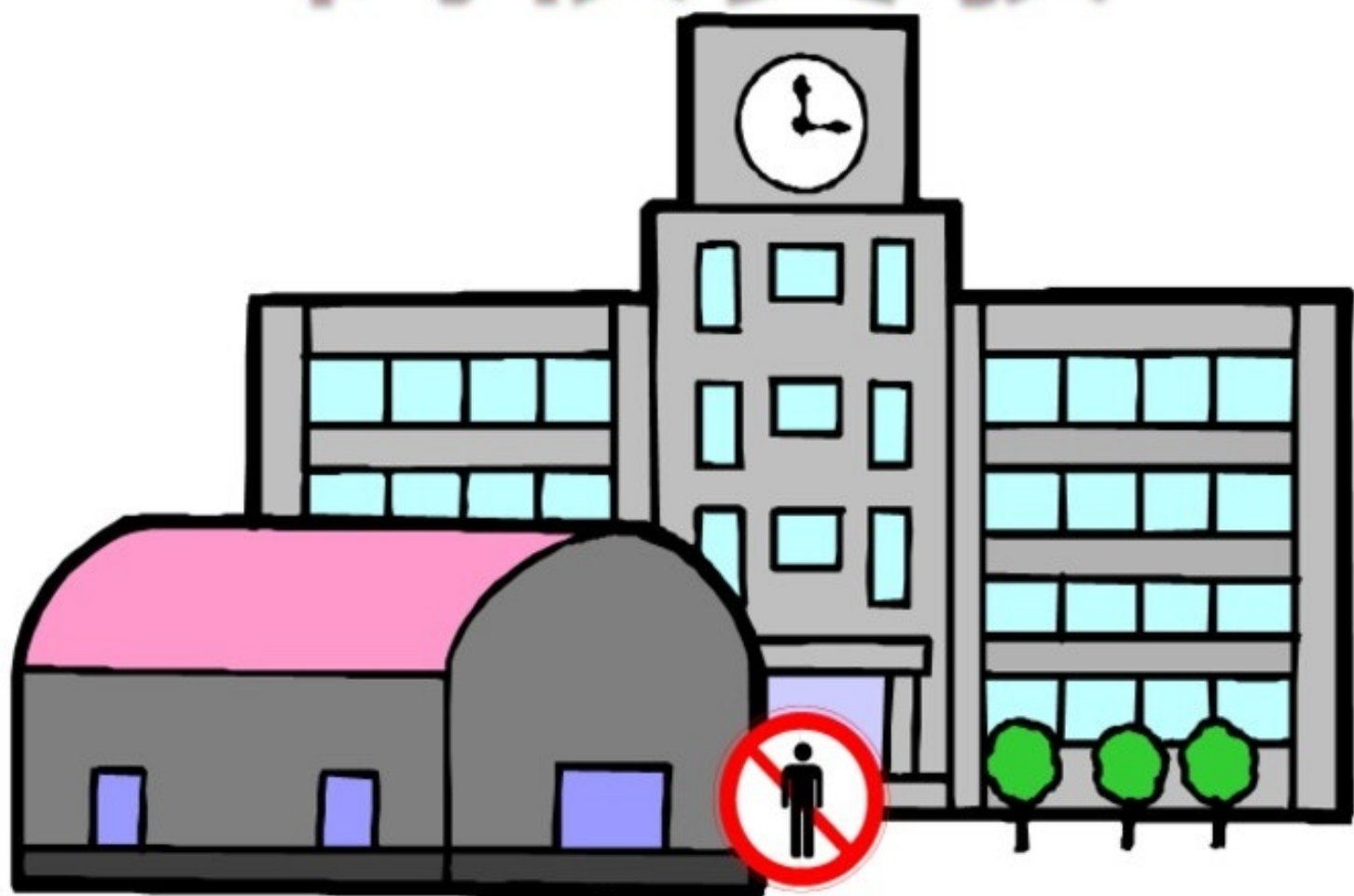


# 不登校からの 高校受験



## 最初に

---

冒頭に書き足します。

創作が停止している間に世間では虐め問題が大炎上。

基本的には「虐めはない」と隠そうとする姿勢が見て取れる。これは、長女が小学校5年の頃に虐めに遭遇した事から変わらない。また、当時から既に「ずる賢い」子供達は「虐めごっこ」と称して大人に対しては「虐めではなく、ごっこ遊び」を装っていた。その子供達の都合の良い言い訳に便乗して「この学校には虐めは存在しない」と言い張る先生側の姿勢。また、学校が虐めを認めないのを良いことに教育委員会も知らん顔を決め込む。保護者会（特に全体会）の席などではプライバシーに関わる事なので・・・というお得意の伝家の宝刀をかざして逃げまわる。そんな大人達を見ていて子供達が真っ直ぐに育つはずがないと思う。長女は既に26歳。少なくとも15年前から教育現場を取り巻く環境も常識も意識も、何も変わってないと言うこと。今回は、様々な知識人がメディアで自説を唱えているが、共感できないものがほとんどである。野田総理の発言に至っては呆れるばかり。（再度停滞していた更新作業を再開しました。2012年8月）

これは我が家の実録奮闘記です。

虐めや不登校という話題は身の回りで普通の出来事になりつつあります。

実際に自分の娘が不登校になり、同僚などに相談すると

「私の娘も高校で1年間ダブった」

とか

「俺の家でも大変だったんだぜ！」

という同僚が何人も居た事を知り、驚くとともに励まされもした。

1年数か月の不登校（保健室登校を含む）を経て、2011年3月1日の都立高校の発表の日。

「咲」の頑張りを見ていた頑固親父は合格を確信していたが・・・。

すでに推薦で進学を決めている同級生も少なくない。

不登校期間が長かった「咲」は成績面でも評価が低くなっているのが当然推薦で受験することは困難であった。

また、「咲」が選んだ高校は都立高校の中でも「総合高校」。

単位制を取るこの高校は、自分で教科を選択できるので自分が必要だと思う教科を選択できるのである。

そこに「咲」は興味を持っていた。

自分の進路を自分自身で組み立てることが出来る

ここが彼女の琴線に触れたようだ。

また、この高校は本年度（2011年）から民間登用の校長が就任。

海外経験が豊富な校長の手腕に頑固親父も期待する部分がある。

ここが評価されたのか倍率が高かった。また、例年倍率が高かった青梅総合が本年度は倍率が急降下した。

頑固親爺も学校説明会に参加したが、その時に感じた「不安感」を多くの保護者が感じたのかわからないが、原因が良くわからない。

総合高校で最も倍率が高いという状況で受験を迎えるのである。

果たして「咲」の頑張りは報われたのか？

## 期待に満ちた中学生生活

---

我が家はちょっと変わった家庭である。（あると思う）

2011年現在で25歳の長女（幼稚園教師）、22歳の長男（就活苦戦中）、15歳の次女（本編の主人公）、12歳の次男（地元の公立中学に進学予定）＋妻という家庭構成。

家族構成自体は「いまどき4人も子供いるの？」という以外は普通ではある。

では、何が変わっているのか？

それは世の中の流れに流されない我が家の「ルール」が存在する点。例えば携帯電話も中学生には不要というルールがあり（長女と長男の時は高校まで）、世間では既に小学生も普通に携帯を持ち始めていたが、我が家では持たせなかった。そこまではあり得る存在だろう。しかし、我が家は子供自身もそれに納得している点が変わっていると思う。

万事が全てそんな感じで「我が家のローカルルール」が存在し、家族全員がそれを共有しているという意味で変わっていると思う。

さて、主人公である娘である。さすがに実名で書く訳には行かないので仮称名で「咲」と呼ぶことにする。

「咲」が中学に進学した時は希望に溢れていた。生徒会に立候補し（1年生は書記しか出来ないので書記を担当）、さらに学級委員も引き受け、自分の目指す学校生活を堪能すべく奮闘。

ひと一倍正義漢の強い「咲」は校則から外れた行為に目をつぶることは出来ずに注意をする機会が多かった。

校外活動でボランティア活動にも参加して、紙芝居の読み聞かせや、手話教室に参加したりもしていた。

出る杭は打たれるという例にたがわず、「うるさい存在」になるまで時間を必要としなかった。吹奏楽部に在籍していた「咲」はクラブでも浮き始め、夏休みが始まる頃には段々と学校生活が息苦しくなり始めていた。

「咲」は責任感が強いので周りが校則を守らないのは自分の責任だと感じていた。自分の力が足りないからだと更に孤軍奮闘をしていた。

そんな娘から相談を受けた頑固親父は「周りに変化を求めても無理だから自分が頑張って許容していかないと駄目だ。頑張れ！」と叱咤激励をする毎日であった。周りが変わらないなら「自分が変われ！」と。

そんな状態が続いていたのだが、まず吹奏楽部で虐めが開始された。

「咲」はフルートを担当していたのだが、自分のパートの楽譜が紛失し、それを「咲」の管理が悪いからだと同級生から追求された。また、「咲」の信頼する先輩に同級生が「咲さんは同情を引こうとして自作自演している」とご注進。当然、根も葉もない嘘である。

数日たって1センチ角にちぎられた楽譜がご丁寧に「咲」の机の中に返却されていた。A3の紙数枚を1センチ角に手でちぎる労力 . . . 。それをわざわざ机に返すという行為。続いて「咲」が学校から貸与されていたフルートが消えた。上履きも消えた。

この時点でも頑固親父は「気にするな。相手と同じ土俵に立ってはいけない。頑張れ！」と励ましていた。

むろん、学校には相談に出向いていた。でも、学校側で出来る対応は限られている。

「娘さんの上履きは職員室で預かります」

トホホ . . . な対応である。

## そして事件は起こった

---

「咲」の心が突然に折れた。

1年生の12月のある寒い日。

学校のトイレの個室で突然のリストカット・・・。

幸いにも授業に出てこない事を不審に思った先生が学校内を搜索してくれ、大事に至る前に発見された。

しかし、この日から「咲」は、全く言葉を発しない子供になってしまった。

自宅でも「筆談」である。

一言も言葉を発しない娘。

でも、虐めた相手はたぶん平気な顔をして登校しているのである。

インターネットで調べたカウンセリングにも通った。ネットでは評判の良いカウンセリング病院である。評判の良い分、費用もそこそこ掛かる。でも、そのカウンセリングは頑固親父から見ると子供の為と言うよりも「親の為」という感が強かった。数か月通院するも際立った効果は感じられなかった。

唯一の収穫は、頑固親父が本人に「頑張れ」と言った言葉が「咲」を追い込んだという事実を認識出来たことであった。

当然、1年生の12月から不登校に。

## 娘の顔から表情が消えた

---

リストカットをした日から「咲」の顔から表情が消えた。

能面のようなのである。

この日から筆談の日々が数か月続くとは思ってもいなかった。

ただ、生活習慣だけは崩れなかった。

きちんと朝起きて来る。

朝食もきちんと食べる。が、無言である。

昼食もきちんと食べる。やはり無言で。

夕食もきちんと食べる。無言で・・・。

夜も寝床には入るのだが眠りが浅いらしく、本人は眠れないと苦悶していた。

それを知るのも筆談である。

カウンセリングに行っても当然喋ることができない。

無言である。

## 言葉が戻った日

---

「咲」が言葉を失って数か月が過ぎた。

パソコン好きな「咲」は毎日パソコンに向かってホームページの更新や、ペイントソフトで絵を描く毎日である。

ある日、10歳上の姉が遊びにきた（幼稚園教諭をしているので幼稚園に近い、自宅から30分位離れた場所でひとり暮らし中）

「咲」と散歩に出かけた。

数時間して戻ってきた「咲」の口から数ヶ月ぶりに言葉が溢れてきた。

数か月ぶりに聞く娘の言葉である。

「咲」が泣いた。そして笑った。

少しだけ感情と表情が戻ったのである。

頑固親父も家内の目からも熱い物が溢れてきた。

どんなカウンセリングよりも「咲」が尊敬していた姉の言葉が1番「咲」の心の奥底に届いたという事だった。

偉大な姉である。

この日から徐々に言葉を発する事が出来るようになっていったが、カウンセリングや学校に面談に行くと筆談に逆戻りという日々の繰り返し。筆談に戻ると言葉を取り戻すのに時間が掛かる。

数時間から数日無言の時間が過ぎて行く



## 保健室登校開始

---

2年生に進級する前に学校側を相談して問題のある生徒を違うクラスにして貰うという協力を依頼した。

しかし、この時点で同学年で不登校に陥っている生徒が6人も居たのである。

これは普通ではないと思うのである。

しかし、学校を批判しても問題は解決しないので共存共栄の選択肢を選択した。

学校やイジメ相手の児童を糾弾しない替りに最大限の協力を願うという作戦である。

当初、保健室登校は存在しない学校あった。

しかし、校長や擁護の先生の協力の許に保健室登校を開始した。

徐々に教室へも顔を出せるようになっていった。

回復への手応えを本人も親も、そして先生も感じていた。

「咲」は高校受験への不安もあり、勉強をしたいと節に願っていたのである。

## 再び事件が起こった

---

クラスへも顔を出せるようになったきた「咲」

しかし、再び事件が起こった。

専科の授業で他の教室で授業をしていた時間に「咲」の机の中から英語の教科書が消えた。

消えただけなら「悪戯」の範疇として捉えることも可能ではある。

しかし、しばらくして英語の教科書が「咲」の机の中に戻ってきた。

ナイフの様な物で切り刻まれた姿で・・・。

これは「悪戯」の域を越えている。

世間では「切れる子供」がナイフで同級生を殺傷したりする事件がちょうど起こっていた事もあり、「咲」の母親は虐めがエスカレートして「咲」が傷付けられる事を危惧した。

学校側と相談した結果、警察に相談に行くことにした。

警察に相談に行くと「これは虐めではなく犯罪である」との判断を頂き、刑事課に通された。

担当の刑事さんも悪質な行為だと言う。

また、紙は指紋が良く残る媒体だとも言い、犯人の指紋の採取は簡単に行えると言う。

しかし、問題は採取した後である。

どうやって「照合」するのか？

相手が前科持ちの凶悪犯ならば警察のデータベースで照合可能であろう。

しかし、相手は中学生である。当然、データベースには存在しない。

かといって、こちらが疑わしいという疑念を持って数人の生徒から指紋を採取する訳にはいかない。

では、解決策はないのか？

唯一の解決策は「在校生徒全員から指紋採取」しかない。

さすがに、これは非現実的な選択肢である。

刑事さんはこちらが望むなら対応すると言っていたが、頑固親父は刑事さんの本心だとは思っていない。

この教科書と、先に説明したちぎられた楽譜は「証拠」として袋に密封して保管してある。刑事さんによると10年以上経っても紙からは指紋が検出可能だと言うので保険がわりに保管してある。

陽の目を見ることが無いことを祈りつつ・・・。

## 再びの不登校

---

この英語の教科書切り刻み事件を境に再び不登校に。

クラスに入るのが怖いと言う。

幸いにも、今回は言葉を失う事はなかった。

リストカットも繰り返してはいない。

2年生の12月。

最初に事件が起こってから1年が過ぎていた。

## 高校受験への不安と絶望

---

「咲」は勉強が好きである。

音楽も好きである。

吹奏楽部で活動もしたいのである。

フルートが吹きたい！

保健室登校を試みる「咲」が体調を崩したりすると頑固親爺や家内が迎えに行く。

放課後だとクラブ活動をしており、遠くから吹奏楽部の奏でる音楽が聞こえてくる。

頑固親爺は無性に腹がたつのであった。

顧問の先生も「のれんに腕押し」的な対応であり、問題をどこまで正しく把握しているのが疑問に思う。

親も子も苦悶の日々が続く。

しかし、時間が過ぎ去り、季節が巡る。

時間だけは無常にも万人に公平である。

貧乏人にも金持ちにも、健康な人にも不健康な人にも、老人にも赤子にも、全ての人類に公平なのである。

悩んでいても、悲しんでいても、苦しんでいても、やがて夜の足音が聞こえ、気が付くと空に太陽が昇り日が巡るのである。

だから悩んでいても無意味だし、人生が勿体無いと思うのが頑固親爺なのだが、この点だけは残念ながら遺伝しなかったようである。

もうすぐ3年生に進級する。

通知表を見ると、ほとんど配慮を感じられない評価である。

校長と面談した時に約束してくれた事が果たされていないと感じてしまう。

「咲」の問題で不登校なら納得せざるおえない。

しかし、犯人がいるのである。「咲」を傷つけ、リストカットに追い込み、再び教科書を切り刻んだ犯人が。

正直に言うと犯人の目星は付いている。間違いなく2～3人に絞れるのである。

いずれの疑わしき生徒も普通に学校に登校しているのである。

それなのに、被害者である「咲」が評価不能という項目が生じ、なぜ5段階で2という評価（そ

れも絶対評価である)をされるのか? 本人の責任では無い部分が多いと言うのにである。

そもそも「義務教育」とは、誰の義務なのか?

これは本来、保護者と教育者側が負う義務なのである。「咲」が負う義務ではないのである。つまり、保護者と教育者が教育を受けさせる「義務」を負うのである。

では、学校側が十分な義務を負っているのか?

努力をしているのかと言うと、これは甚だ疑問を感じざるおえない。

この中学はこれまでもテニス部顧問が不祥事を起こしたり、3年生の2学期に大量カンニング事件が起こったりしている。いずれも長男が在学中の出来事である。

当時、保護者の中に過激な方がおり、いきなり教育委員会に直談判したりして騒ぎを大きくし、解決を困難にしていた。また、新聞社に知人がいたのか、保護者自身が務めていたのか分からなかったが大手の新聞に記事として扱われたりもした。しかし、頑固親爺は学校を対立しても何も解決しないし、何も生み出さないというのが持論であるので意味もなく攻撃はしない。また、攻撃するなら直接校長や副校長と談判する。

学校側との何度かの話し合いを経ても学校を取り巻く環境は一進一退。簡単には解決はしないのである。

そんな中で「咲」の中ではカウンセリングの仕事に付きたいと言う目標が生まれつつあった。自分が受けたカウンセリングの経験から患者の気持ちが分かる先生になりたいと思っているらしい。

一足飛びに進学したい大学を選び始めた。上智大学が目白大学が良いらしい。

そこから逆算して高校のレベルを考えている。

その大学に進学する事が可能である高校が最低線の選択基準と考えている。

変わった娘ではあるが、合理的ではある。

「咲」は現時点で「推薦」は諦めている。

また、大学から逆算する高校進学とは相反するが、高校進学自体も疑問視している。俗に言うサポート校への進学が現実的かもという超現実的な選択肢も考え始めている。

すでに2月を迎えている。あと2ヶ月で3年生に進級するのに不登校が続いているのだから。

そんな「咲」とサポート校の見学に向かう頑固親父である。

あっという間に3年生になりました

---

悩んでいる暇もなく3年生に進級。

ここで「咲」は一念発起した。長い眠りから目覚めたのである。

「3年生から学校に行く」と宣言した。

そして始業式の日からクラスに登校した。

そして、その日から無遅刻無欠勤で登校を続ける毎日が始まったのである。

「咲」の中で何が変わったのか？

学校側が変わったのか？

はたして何が変わったのか？

結局、何も変わっていないのです。

相変わらず「咲」を傷つける言葉を浴びせる生徒が何人か存在する。

クラスも違い、もはや何の接点も無いにも関わらず「咲」の教室までわざわざ訪れて

「不登校なのになんで学校に来ているんだよ」

「来なくて良いから」

などと心無い言葉を浴びせる。

頑固親爺もスイッチを切り替えて攻撃モードに変更した。

そういう言葉を浴びせた家に電話して親を攻撃する事にした。

当然、そういった子供は取り繕うのは上手なので相手の親は

「子供に確認しましたが、そんな事は無いと言っています」

「証拠があるのですか？」

もちろん、相手の言質は確認して上での攻撃である。

今は秋葉原では様々な便利な機器が売られているのである。

でも、それを表に出して相手の生徒を攻撃する気は無い。

あくまでも、子供の資質は親の責任だと思っているので、攻撃するなら保護者である。

証拠はあるが、それを使う気は無い。

使うとしたら、問題が大きくなり、裁判沙汰にでもなった時だろうが、そんな自体は望んでいない。

この親に対する攻撃は功を奏して「咲」に対する口撃は激減した。

「咲」の勉強がしたい、高校へ行きたい

という欲求が全てに優先しただけの話なのです。

時々、疲れはてて帰宅します。

玄関の扉を開けた途端に泣き崩れた事も数えきれません。

変わったと言えば「頑張れ!」「お前が変わらないと」という励ましを止めた事くらいでしょうか。

でも、さすがに1年以上きちんと授業を受けていなかったのも、なかなか苦戦の日々が続きます。

しかし、塾に通う余力は本人に残っていません。

今度は、勉強と格闘する日々が始まったのです。



## 心無い言葉を発する同級生たち

---

知ってるか？ こいつ登校拒否児だったんだぜ？

学校来んなよ！

登校拒否してたくせにうるせえんだよ

咲って浮いてるよね！

前のページで親に対する攻撃で「咲」に対する口撃は減ったのであるが、無くなった訳ではない。

相変わらず心無い言葉が飛び交う。

また、他の不登校児童も出欠を取る時に先生が名前すら呼ばないという姿を見て悲しむ「咲」親にしてみれば「他人の心配している場合ではないだろう」と思うのだが。

〇〇ちゃんが虐めにあっていて可哀想だから助けに入ったら、私まで虐められたと悲しむ「咲」でも、友達に手を差し伸べる行為を止める事はしない。  
根本的な部分では強い物を持っているのだろう。

土曜教室（地元の市で開催する無料の勉強会的な催し）に参加した「咲」。偶然、同級生の男子が居た。

すると、「おい、知ってるか？ こいつ登校拒否で学校に来てなかったんだぜ？」

となんの前触れも無く周囲に説明を始めた。

塾でも別の男子が同様な発言を。

頑固親爺は理解不可能である。

基本的に「咲」と現時点では接点がない男子生徒である。

こういった子供達の行為が理解できない。

## 夏休みを目前にして

---

さて、あっという間に夏休みが目前に迫ってきました。  
成績は悲惨としか言えません。

特に英語と数学。

「咲」も、さすがにエンジンが掛かりだしました。  
塾に行きたいと言い出しました。

しかし、やはり条件付きです。

同級生が来ない塾に行きたいと。

「咲」を一緒に塾巡りを開始。

いくつかの塾を見て回りました。さすがに同級生が来ないという条件では通うのに時間が掛かります。

結局10校位見て歩いた結果、家の近所の塾で比較的に同級生が少ない所を選びました。  
塾長が「可能な限り同級生を合わないスケジュールを組んであげる」と協力を申し出てくれたので。

塾に入ってすぐに確認を兼ねて模試を受けました。

当然ながら悲惨な結果に。

この時点ですでに3年生の7月。

あまりにも遅い再スタートです。

英語は十数点しか取れていません。数学も大差なし。理科も同様。  
比較的に社会と国語は及第点に少し届かない程度。

さて、ここから開始する受験はどんな展開を見せるのでしょうか？

頑固親父は80%程度の確率で「サポート校」への進学を覚悟していました。

## 塾に行き始める・・・

---

「咲」は塾に行き始めた。

いくつかの塾で体験授業を受けたが、結局通塾の事を考えて自宅の近くにある塾に決めた。

運が悪い事に「咲」の天敵と言える同級生が何人か在籍している。これは事前に確認済み。塾側が可能な限り同じ時間帯にならないように、近くの席にならないように配慮をしてくれると言う部分に期待。また、いつまでも逃げていたのでは何も解決しないし、歯車も回らないので「咲」は妥協した。

ここから塾の先生も関心する頑張りを発揮するのであった。

しかし、頑張りと成績が比例しない日々が続く。

相変わらず学校のテストは低空飛行を続け、塾で行う模試も悲惨な結果。当然、希望する高校の合否のグラフの欄は・・・。

頑固親爺は理数系は得意なので数学と理科は受験までに7～80点は取れるようになると確信を持っている。

この教科は「受験」という枠で考えると点数を取ることは比較的容易であると思っている。長女と長男の受験の時も頑固親爺が塾で足りない部分を教えてきた。家内曰く「塾の講師したら？」という指導である（笑）

しかし、問題は英語である。

「咲」は文章を書くのが好きなので国語は心配していない。停滞していた漢字などを着々と練習していけば心配はないと思っている。

取り敢えず、英語に重点を置く塾での戦いが開始された。頑固親爺は受験英語は苦手なのである。英語自体はアメリカに単身で半年暮らした事もあり、アレルギーは無いのであるが、受験英語は駄目だ。正直な話し、受験英語が得意であれば自身の大学受験もかなり様相が変わっていた筈である（汗；）

「咲」の受験の成否は英語に掛かっていると言えるのである。果たして半年で失われた1年数か月を取り戻せるか？

タブレットを使って絵を描くのが得意な「咲」

自分のHPを作ったり、小説を書いたりしている。

小説も2011年4月に文芸社から出版される（何人かの著者の作品が収められる形での出版）



安いタブレットを使っている割には上手に書いている。

細かい部分の書き込みが凄だと思う。A3で印刷しても真価を発揮できない程である。A1での印刷に耐えられる書き込みである。

そんな「咲」の葛藤が、勉強とパソコンの時間的な折り合いをどう付けるか？

が最大の悩みである。

受験が終わったら

個展を開きたい

のが目標である。

悩める「咲」はパソコンを封印してみた。

しかし、その封印は数日で破ることに（笑）

どちらにしても、勉強の調べ事などにパソコンは必須なのであった。

そんな「咲」の背中に母の罵声が飛ぶ

「またパソコンで遊んでいるの！ 受験生でしょう！」

「咲」の苦闘は家でも続くのであった。

そして、頑固親爺と家内とのバトル。

常に父親は「子供に甘い」と怒られるのである（笑）

## 国語の模試の結果！

---

塾で受けた「W都立合格もぎ」の10月31日の回において国語の得点が96点、偏差値73。

すばらしい！

さすがに「文学少女」の面目躍如である。

しかし、それ以外の教科は・・・。

相変わらず、頑張りが得点に結び付かない毎日である。

しかし、本人は飽きること無くコツコツと取り組んでいる。

問題は、立ち足かかる壁を乗り越える日が何時なのか？ なのである。

壁と乗り越えるのか、打ち砕くのか、廻り込むのか？

どちらにしても逃げ出さずに取り組んで欲しい。

頑張れ！

今度は無言で応援する頑固親爺であった。

## 過去問にチャレンジ開始

---

都立高校の過去問に取り組み始めた。

当然、苦戦中。

しかし、逃げ出さずに黙々と取り組む。

繰り返し何度も何度も。

塾で質問し、自宅では父に質問し、黙々と取り組んでいる。

過去問という限られた範囲に絞り込んでの勉強に突入したので、徐々に頑張りが得点に結び付き始めた。

勉強をする顔が笑顔の時間が増えて来た。

しかし、既に11月が終わり、12月に突入。

いよいよ志望校の決定の時期がやってきたのである。

また、以前は都立高校は受験の機会は1度であり、あとは追加募集（基本的には定員割れしたり、想定以上に入学辞退者が多かった場合に限定される）しかなかった。しかし、今回は前期と後期の2回の受験チャンスがある。もっとも、その組み合わせは限定されるので、必ずしも希望通りの受験が可能になる訳ではないのだが。

念の為に私学も1校受験することに決めた。推薦が可能な選択肢から選んだ。

この高校は8年前に長男が受験する際に何度か足を運んだ学校である。非常に特色のある校舎であり、趣きのある佇まいを見せる。当時は生徒の自主性を最大限に尊重し、生徒と先生と保護者が協力して様々な取り組みを行っていた。古代の井戸の掘り方の再現に挑戦したり、面白い事をやっていた。

しかし、8年振りに訪れた学校は様変わりしていた。校舎や環境は変わらない姿を見せていたが、生徒の自主性は消え失せたように感じられた。

長女が通った中高一貫の女子高も在学する6年間で様変わりした。残念なのは、両校ともに「良い部分」が無くなってしまった点。

そんな訳で「咲」の本命は都立の総合高校に決めることにした。

思い返せば、1年前は無受験で入れるサポート校しか選択肢がないと諦めていたのが嘘のようである。

なんとか模試もで合格圏にギリギリ入っている。しかし、これは国語の高得点に支えられているので、かなりの危うさを含んでいるのだが、それは本人も承知している。

過去問も6年間分を1回転したようだ。

2回転目に入ったと先ほど言っていた。

4人の兄弟姉妹の中で、唯一「勉強が楽しい」という。

こう考えてみると、不登校も悪くなかったのかもと思うことがある。

不登校だった期間に絵を描く能力と文書を書く能力は格段の向上を見せた。そして、勉強したくても出来なかった裏返しなのか、現在は勉強が楽しいと言っている。

これは、不登校期間中も規則正しい生活をおこなっていた事が大きいと思う。



## 願書提出にむけて

---

さて、年が明けました。

2011年、兎年です。

立ち足はだかる壁も一気に飛び越えたいものです。

過去問も自己採点を見ているとほとんど○が付いています。

本人に聞くとコンスタントに80点台をキープしているとの事。

W模試では合格圏ギリギリという感じでしたが、過去問の得点から推測すると安全圏に入っていると判断できるレベルだろう。しかし、受験に絶対はないのである。

あとは実力を出し切れる事を祈るのみである。

悔いのない受験を実現して欲しいと願う。

当初の予定通りに総合高校に願書を出すことに決定した。

「咲」の周りでは推薦に失敗した同級生も多い。

結局、不登校は受験には大きな障害にはならなかった。もっとも、きちんと登校していれば推薦で楽に受験できたであろうし、もしかすると、もっとレベルの高い学校の受験も可能だったかもしれない。

しかし、今の「咲」を見ていると、不登校も保健室登校も含めて彼女の成長を助けてくれる切っ掛けとなった。苦境からの受験勉強も、努力すれば必ず届くという貴重な体験をさせてくれた。

こう考えると、人生も捨てたものではない。

逆に「咲」に対して酷い行いをした同級生達は、同じくらい充実した毎日を過ごしているのだろうか？

そう考えると、人生って難しいと思う。

正直であれ！

優しくあれ！

決して逃げ出すな！

人を思いやれ！

## 願書差し替えの日 ラストチャンス！

---

親子ともに慌ただしくしているのでアツと言う間に時間が過ぎ去ってゆく。

早くも願書取り下げ&再提出の期限が迫ってきた。

困った事に昨年までは総合高校で倍率1位だった青梅総合が相変わらず今年は低迷している。学校説明会の日頑固親父も家内も都合が付かず長女が「咲」と行ったのだが、長女曰く「駄目じゃん？」という判断を下されて居たのだが、その印象が当たったのか？

その反動を受けて「咲」が受験する高校が高倍率になる結果になり、本人はプレッシャーを感じている。しかし、願書の取り下げ&再提出というのも一種の博打である。倍率が高いからと低い所へ変更しようとする人が多数現れた場合の事を考えると悩ましい選択肢である。結局、「咲」は本人が決めた第一志望校への受験を敢行する事に決定しました。

## 受験の日が迫る！

---

塾から申し込んで行う模試。 前は国語の得点が95点だったので志望校が合格圏内に届いていたが、はっきりいって95点は出来すぎ。心配した通り、次の模試では総合得点が下がった。当然、志望校への合格確率も下がる結果になった。

塾に相談に行き、戦略の確認。 私の持論である言語学である「英語」は短期勝負は不可能なので英語の時間数を減らして短期決戦が可能な「数学」をテコ入れする事を確認。 英語は不登校のブランクが大きく影を落としていたが、「咲」の頑張りでも人並み程度の点数は期待できる程度までなんとか挽回している。しかし、ここで更に英語に注力しても、大きな得点の伸びは期待薄い。ここは勝負出ることにして、英語は点数の現状維持を死守。国語は得意分野なので油断せず。漢字関連での取りこぼしがないように自分で見直しをする。社会も比較的得意だから、問題は数学。正直いって、これまでの模試でも大きく凹んでいたのが数学。残り僅かだが、たぶん合否の明暗は数学の出来次第」になると思われる。 逆に、短期勝負が可能だと思っているから優先度を下げて他の科目を優先してきたのだ。

最後のラストスパートに残しておいた数学、この進展が可否を決めることになるのである。頑固親爺の経験では、「苦手な部分を克服するよりも、得意な部分を更に伸ばす！」が持論である。

昔、レース（バイク）に参加してい頃、苦手なコーナーを克服しようと頑張るとなぜがラップタイムが低下。得意なコーナーを更に早く走る事を目指したら、ラップタイムが大きく伸びた。勉強とレースを同じ土俵で考える馬鹿親爺もどうかと思うが、とりあえず、その作戦を選択した。

無謀なのか、賢い選択なのか・・・。

## いよいよ受験が迫る！

---

さすがに最近「咲」はイラついている。

自分で選んだ高校だとしても、今の「咲」にとっては若干高めなレベル。もし不合格なら推薦で決まっている私学へ進学。この学校は、とても魅力的な学校ではあるのだが、最近生徒数の減少対策から以前とは雰囲気が大きく異なっている。まして、親の経済事情をしる「咲」としては、都立高校合格にプレッシャーが大きく襲いかかる。

日々、険しい顔つきになる「咲」を目の前にして、親の取れる選択肢は多くはない。

塾の指導も、すでに滑り止めの私学の合格が決まっているので、いまひとつ真剣味に欠ける。頑張れと言いたいが、それで大きく「咲」を傷つけた頑固親爺は、困惑している。励ますのがプレッシャーになるのか？ 無視するのも違うだろうと思う。

親も悩めば、本人も悩んでいる。 救いなのは、家の中から「笑い」が消えていないこと。

馬鹿な親父のお陰か（笑）

## 受験当日

---

さすがに我が家は親は同伴しない。しても無駄だから。

永遠とも思われる半日が過ぎ「咲」が笑顔で帰宅。ある程度は思った様に試験が受けられた様だ。自己採点では昨年の合格実績を大きく上回っていると笑顔な「咲」

この笑顔が合格発表当日まで続くことに期待したい。

## 合格発表の日

頑固親父と二人で合格発表に向かうことに。

親子共々ドキドキ、ワクワクだ。

この辺りの話は月並みになってしまうのだが、掲示板に無事に娘の番号を発見しました。

さて、ここで話が終わるなら良かったのですが、高校入学後も様々な苦難に遭遇し、苦闘の日々が始まるとは多分娘は思っていなかったと思います。

親としては、友達関係の構築が下手な部分があるので順風満帆とはいかないのでは？ と少しは覚悟をしていましたが・・・。



## 入学してから・・・

---

入学してからも心配した通り、クラスメイトとの軋轢に悩み始めました。

娘いわく、相性が合う、合わないがあるのだから相手がこちらを気に入らないのなら放っという欲しいと言う。それを周囲の人間を駆り立てて数人で攻撃対象にするから頭にくると。

まあ、親から見ると「もう少し上手に人間関係を構築したら？」と思うのだが、どうも性格的にそういう許容が娘側にも足りない模様。 虐めまでは行かないが、娘にとっては大きなストレスになっているのは見ていてわかる。



これ以降は執筆中です。

---

適時更新していきます。



## 登校拒否からの高校受験（親の立場から）

<http://p.booklog.jp/book/21793>

著者：頑固親父

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/herofuruta/profile>

パブー内で「頑固親爺」で検索してください。

順次、執筆して行く予定です。

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21793>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21793>